
Story Train

春菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Story Train

【ZPDF】

Z9942V

【作者名】

春菜

【あらすじ】

仕事帰りに乗り込んだいつもと同じ最終電車。日常に疲れきった彼女を乗せた電車が行く先は子供のときに聞いたような優しい物語の世界。

出発駅

とある繁華街の真ん中、とある駅のホームに電車が停車して大きな溜息をつく。

” プシュー。 ”

そうして開いた口の中へ空気の代わりに吸い込まれていく人々。それとまた同じ列に並び、同じスピードで仕事終わりの彼女も疲れきった顔をして電車に乗り込んだ。

いつもと同じ最終電車、いつもと同じ席に着く。

同じ車両に乗り込んだ人は少なく、それも駅に着くたびに一人減り、二人減り、やがていなくなっていく。

電車が止まるたびに出発を告げるベルの音が決まったタイミングでけたたましく鳴る。それはドアに遮られ、くぐもって小さくなり、ぶつりと途絶える。ゴトリ、と大きく揺れて動き出した街の光。段々、街灯とネオンに照らされていた景色が遠ざかると夜の華やかさが薄れ、外は夜の闇に覆い尽くされていく。暗い窓の中に映る明るい車内。座っている彼女は彼女自身と目が合つた。

窓の中の世界は鏡の世界と違つて現実味がない。淡く歪んだ偽者の世界。彼女は生氣のない顔に自嘲に似た微笑みを浮かべた。

彼女は座席に全身を預け、荷物を投げ出し、俯いた。虚ろに掌を見つめている目には涙が滲み潤んでいるが、溢れ出でることはなかつた。

もうずっと泣いていない。最後に声を出して笑つたのがいつだつたかも思い出せないくらいだ。静かに脈打つ心臓の鼓動が高鳴るような出来事はもう何も存在しないような気さえしてきていた。そしてそれを悲しいと思う心さえ疲れ果てた。

低い男性の声の車内アナウンスと電車の音が重なり合いながら車内に響く。

「 これよりトンネルを通過します。 」

その声はどこか遠く、自分とは関係ないことのような気がした。だけど、その言葉を頭ですっかり飲み込んでしまってからふと疑問に思った。この電車が通る道にトンネルなんてあつただろうか。まさか行き先の違う電車に乗り込んでいたのか？そんなはずはない。これは最終電車なのだ。行き先が変わるはずがない。

不安を感じた彼女が外の景色を見て今いる場所を確かめようと視線を上げた瞬間、車内の明かりが一斉に消え、同時に電車の揺れもピタリと止まった。

窓の外は相変わらず暗闇だったが、不思議なことに胸騒ぎも、恐ろしさも感じなかつた。

無数の小さな光がまるで螢のように明滅して車内を照らしていたからだ。その優しい煌めきに懐かしささえ覚える。やがてその光は何かに吸い寄せられるように窓から車内に飛び込んできた。どこかで見覚えのある小さな光たちに包まれて手を伸ばした彼女は気付いた。これは、星だ。

一ノ駅【STARS】

見上げた夜空に星が流れる人はその星に願いを乗せる。その星の光が描く軌跡に夢を願うのだ。

その行為こそが儂い夢物語だと知つていながら、それでも星たちは祈りを乗せて流れしていく。

星は空に光っているからこそ星と呼ばれる。では光らない星は？ここに生まれたての星がいる。星のゆりかごから出てきたばかりでまだ呼ばれる名前もない、大きな体だけど光ることができない小さな子供の星だ。先に生まれてきた兄弟星たちは明るく輝きながら小さな星を見守り、励ました。小さな星はその中で声なき産声をあげながら心臓のように脈打っていた。

「これは大きな星だね。いつかきっと美しい光を放つだろうね。」兄弟たちが囁き合う。しかし、どれだけの時間が過ぎても生まれたばかりの小さな星は光ることができずにいた。

小さな星は周りの星に聞いた。

「どうしたらあなたたちのように光ることができるの？」

一番近くにいた光る星が答えた。

「大丈夫、みんな最初から自分で光っていた訳じゃないんだ。そうして大きく呼吸をしていればいつか必ず光ができるよ。」

それを聞いた小さな星は嬉しそうに笑つてまた小さく小さく脈打つた。だけど、光らなかつた。

答えてくれた兄弟星が流れていってしまつてもまだ光ることができなかつた。

「このまま光らなかつたら僕はどうなるんだろう。」

小さな星はときどき、そんなことを考えるようになつた。キラキラ光る兄弟たちは次から次へと流れでどこかへ消えていく。小さな星は聞いた。

「星は流れたらどうなるの？」

光る星が答えた。

「あそこに大きな青い星があるだるー、あの地球という星の生き物が僕たちを見つけて願いという魔法をかけてくれたら僕たちは願い星になれる。」

「願い星って? どうなるの?」

「僕たちが空から落ちて姿が見えなくなつても、その願いが僕たちを忘れずにしてくれる。永遠に消えることのない星になれるのさ。でもお前は光つてないからきっと消えてなくなるだけだな。」

光る星はからかうようにそう言つた。それを聞いた小さな星は悲しくなつた。ぎゅっと小さくなつたきり動かなくなつた。

答えたその星もいつしか遠い空に流れていつたが、小さな星は悲しみに胸を痛めて、流れていつた星の姿も、自分のことも見えずに小さくなつたまま、空から流れるこどもできず宙を彷徨つていた。やがて大きな太陽が見えてきた。いつも明るく、決して動くことのない星。

しょんぼりと俯く小さな星に太陽は言つた。

「どうしたの? そんな悲しそうにして。」

「僕は光らない星だ。だから願い星にもなれない。」

泣きそうに小さな星は言つた。太陽は笑つた。

「君はもう十分に光つているじゃないか。」

そう言われて顔を上げた小さな星は氣付いた。生まれたときより小さくなつてしまつた星はいつの間にか明るく光つていた。

小さな星は喜びに膨らんでまた小さくなり更に明るく光つた。

「もう少し私の周りを回つたら地球に引かれるまま近付いてござらん。」

「小さな星は頷いてお礼を言い、太陽とお別れした。そして月に会つた。月は太陽のように光つていいが明るく輝いていた。

「あなたの幸運を祈つてるわ。」

月が優しい声で言つた。

「もし、誰にも見つからず、願い星になれなかつたらどうしよう。」

」

小さな星は言った。月は微笑んだ。

「私がどうしてこんなに明るいか知つていて？」

「ううん。どうしてなの？」

「あの太陽の光が私を地球まで光が届く明るい星にしているの。この宇宙のどの星も私と同じように太陽の光に照らされているわ。」

「じゃあ、僕も？」

「光ろうと頑張っていた君も、今光っている君も、誰かが見ていたわ。大丈夫。怖がらないで行つてこらん。願いをたくさん集めて大きな願い星になりなさい。」

小さな星は頷いた。そして地球に向かつてゆっくり進みだした。

一ノ駅【花の咲く場所】

小さな光が彼女の広げた両手の中にぽとりと落ちた。彼女は願うよう手を合わせて指を組んだ。すると周りの星は消え、辺りが突然明るくなつた。

鳥の声が聞こえてきた。手の中に落ちた光が体温を持つて柔らかい感触に変わつた。両手を開いて覗き込むと小鳥が一羽、チチチと轉りながら大きく羽ばたいて飛び立つていつた。その鳥を追いかけて空を見上げると、そこは森だつた。

森には様々な生き物が住んでいる。鳥やサル、植物に虫。小さな動物や大きな体の猛獸も住んでいる。

この木の上に住む小さな生き物は全身がふさふさで茶色く、耳と尻尾はふわりとした毛に包まれ、大きく愛らしい瞳をしている。リスだ。

リスは木の実を拾い集めて食べ、大きな木の上に枯れ枝を器用に組んで巣を作り暮らしていた。今日もどこからか新しい枝を一本、拾つてきた。

枯れ枝には萎れた黒い葉がついていた。リスはそれを持ち帰り、いつものように巣の端に差した。枝と一緒に持ち帰った木の実の甘さを味わいながら、萎れた黒い葉がゆらゆらと風に揺れるのを見ていた。

その葉に浮き出た不思議な模様がリスのお気に入りだつた。

毎日その葉を見ながら持ち帰った木の実を頬張るのがリスの日課になつた。木の実を持ち帰ることができなかつた日でもリスはその葉をうつとりと眺めて過ごしていた。

ある日の朝、リスがいつも通り目を覚ますと黒い葉が一つに分かれていった。一つはいつもの場所に。もう一つは同じ形をしてその枝の先端に新しくぶら下がっていた。不思議に思い首を傾げたりスの目

の前で新しい黒い葉はゆっくりと時間をかけて段々とまつすぐに開いていった。

リスは驚いて目を擦った。

ピンと伸びた大きな葉はぎりもなく動いてみせた。そして葉は広がつて一枚になり、羽になつた。

そこまで見てリスはやっと枝と一緒に蝶を連れて帰つてきたことに気付いた。

広がつた羽の内側は美しい橙色をしていて真ん中に大きな田玉のような模様があつた。その田玉と田が合つたリスはキヤツと悲鳴をあげ、怯えて巣の隅っこで小さく丸まつた。

蝶は怖がるリスのことなど氣にもせず、まるで出来上がりっぱかりの羽を自慢するように開いたり閉じたりしていた。

恐る恐るリスは聞いた。

「どうしてその羽ですぐに飛んで行かないの？」

蝶はやつとりスに気付いたかのように静かに羽を閉じて、答えた。

「私は生まれた場所から遠く離れてしまつた。風の声を聞かないと帰り道がわからないの。」

それを聞いたリスは申し訳なく思つた。蝶が生まれるはずだつた場所から遠く離れた巣まで運んだのは自分だと正直に言い出せなかつた。

「風に声があるの？」

「うん。風は色々な音を拾つて旅をしているの。その声を聞くのよ。

「それで、どうやって帰る場所がわかるの？」

「同じ場所で生まれた仲間たちの声を聞くの。でも・・・・」

そこまで言つて蝶はがっかりしたようになだれた。リスは悲しそうな蝶に向かつて言つた。

「それなら僕が君の生まれたところまで連れていつてあげる。」

「ホント？あなたにわかるの？」

「もちろんだ。心配いらない。」

嬉しそうにまた羽をひらひらさせる蝶を見て、リスは胸を撫で下ろした。

蝶を驚かせないようになると手を伸ばし、蝶が留まっている枯れ枝をポキンと折つて口にくわえると、リスは走り出した。蝶と出会つたところまで、枯葉に覆われた地面をガサガサ言わせながら走つた。やがてリスは蝶と出会つた場所に辿り着いた。蝶は何度も感謝して、感心したように言つた。

「すごいわ。あなた、何でも知ってるのね。」

リスは照れながら言つた。

「そんなことないよ。知つているのは美味しい実がなる木の場所と、暖かい太陽のよく当たる場所だけ。」

蝶は興味津々で聞いた。

「そこには花は咲いてるかしら？」

リスは自信満々に

「もちろんさ！」

と言い、蝶をその場所まで案内した。

そこは本当に暖かい場所だつた。冬の雪の日でもなければ一年中、草や木に何かの花が咲いていて甘い匂いが漂つてゐる。仲間の蝶たちもそこにいた。蝶はその場所に感動して辺りを飛び回つた。

「あなたって本当にすごいのね。」

リスは首を横に振つた。

「君の方がスゴイよ。僕は風の声なんて聞いたことがないもの。」

蝶は羽を興奮気味にパタパタしながら言つた。

「簡単よ。いい場所を教えてくれたお礼にやり方を教えてあげる。」

そう言つてリスに風の声の聞き方と風に声を預ける方法を教えてくれた。

「ひつやつて風に声を預ければ、遠くのどんな場所にいてもお話でできるわ。」

蝶はもう一度お礼を言つて、仲間たちのいる空へ飛んでいった。リスはその後姿を見送つた後、軽い足取りで帰つた。

もう羽の大きな目玉は怖くなくなっていた。

それからリスと蝶は毎日のように風で話をした。

ある日は天気の話をしたり、ある日は仲間の話をしたり、またある日はリスが蓄えている木の実を狙いにきた小鳥たちに巣を襲われたことを話したりした。

「そんな小さな鳥なら、私の羽の目玉で驚かせて追い払ってあげるわ。」

蝶はそう言つて、リスの巣にきててくれた。リスの巣の周りにいた小鳥たちはその大きな目玉を恐れてリスの巣に近付かなくなつた。リスはお礼に、蝶が蜘蛛の巣に引っかかるないように注意したり、蝶を狙つていた大きな虫から助けてあげたりもした。

冬が近付いてきて、もうすぐ大きな雪の粒を降らせそうな雲が空を覆いつくしたある日、突然蝶がリスの前に現れた。

「どうしたの？」

リスが聞いた。蝶は言った。

「さよならを言いにきたの。」

「どうして？」

「私はきっとこの冬を越すことはできないわ。」

そう言って蝶はボロボロの羽を開いて見せた。

美しかつた橙色の羽は鱗粉が剥げ、出会ったときリスが怖がつた大きな目玉も歪んでしまつていた。

「今までありがとうございました。元気でね。」

蝶は言った。リスは黙つて頷き、バイバイと手を振つた。蝶が飛び立つていつてしまつてからリスは泣いた。丸くて黒い瞳からボロボロと涙を流し、大粒の雪が降り始めるまで泣き続けた。

仲間の少ないこの森でリスにとつて初めての友達だつた。自分も蝶だつたらよかつたのに。そうすればあの花畠と一緒に飛び回つて、もっと同じ時間を過ごして、ずっと一緒にいられたのに。

リスはその冬の間、何度も凍えるような冷たい風に声を預けて蝶を呼び続けた。でも蝶からの返事はなかつた。

風に何度も呼びかけても、風は蝶の声をリスに届けてくれなかつた。降り積もつた雪が融けていき、春が来た。リスは目覚めて、暖かい春の匂いを感じた。

そして風の中に冬を越した生き物たちの笑い声が響くのを聞いて、もしかしたら蝶もこの冬を越せたかもしれないと思い、リスは巣を飛び出した。

萎れた枯葉を蹴散らし走った。花の匂いのする方へ、蝶がそこにいることを祈りながら走つた。

あの日、リスが教えた花畠に着いて空を見上げると、そこには大きな目玉をつけた橙色の蝶がいた。たくさんの蝶がいた。

終着駅【時の船】

彼女もリスと同じ空を見上げた。橙色の蝶がヒラヒラと飛び交う空は美しく、初めて見る場所のはずなのにどこか懐かしかつた。彼女は目を閉じて花の甘い匂いを吸い込んだ。たっぷり吸い込んだ息をふう、と吐き出し目を開く。そこは再び電車の中だった。また電車が揺れ始めたが、その動きは緩く穏やかで、電車が動き出したような揺れ方ではなかつた。

どこからか潮騒が聞こえてくる。不思議に思った彼女が窓に近付き、耳を澄ましていると

「船の上の生活は如何ですか？不自由はありませんか？」

背後から突然、声をかけられた。彼女は驚いて飛び上がった。声をかけてきた青年は眉を寄せて困ったように笑つた。

「すみません。驚かせてしましましたね。」

その笑顔のせいか、驚いたことが恥ずかしかつたのか、彼女は頬を紅く染めて俯いた。

青年は俯く彼女を手招きして座るように促すと、自分も彼女の横に腰掛けた。

「この船に医者は私だけですから、何かあればすぐに言つて下さい。」

優しい声でそう言った青年に彼女は聞いた。

「他にも誰かいるんですか？」

「おや、まだお会いしていませんか？この船にはあと二人いますよ。もうそろそろ朝食に起きてくるはずです。」

目の前の窓から朝日が差し込んで、二人の座っている場所を照らしていた。窓の外には深い緑色の海とまだ夜の余韻が残る青い空が広がっていた。青年が静かに開いた木製のドアから忍び込んできた空気は冷たく潮の香りを含んでいた。

「私たちも朝食を食べに行きましょう。」

青年が言つた。彼女は頷いて立ち上がり、戸惑いながらドアをくべつた。

船はあまり大きくない客船のよつだつた。周りは海と空ばかりで島や岩場すら見当たらない。潮風を受けながら細い柵で仕切られた通路を通り、つきあたりの階段を登つた。そこに食堂があつた。食堂に着くと彼女たちより先に一人の老婆が座つていた。厨房から音が聞こえてくるところを見るとここにも誰かいるのだろう。

青年は老婆に言つた。

「彼はまだ起きていていませんか。」

しばらく皿を閉じて沈黙した後、老婆は答えた。

「起きてこる。だが、あまり食べる気が起きぬようでの。」

「僕が声をかけてきましょうか。」

「やめておけ。つむさがられるわ。」

老婆が眉を寄せてやれやれと言つよつて首を振ると、厨房から少年のような声が聞こえてきた。

「あとで僕が部屋まで食事を届けにいくよ。」

その声の主は狸だった。こげ茶色の体の小さな狸がふわふさの尻尾を引きずりながら小さな両手に美味しそうな朝食を乗せた皿を持ち、二足歩行でテーブルに近付いてくる。

その様子を見た青年がすかさず立ち上がり、その皿を受け取つて一つを老婆の前に置き、もう一つを彼女の前に置いた。

狸は小走りで厨房に戻ると、また同じよつて一つの皿を持ってきて少し背の高い椅子の席と、さつき青年が座つていた席の前に置いた。彼女はその様子をじつと見つめていた。

老婆が言つた。

「気味が悪いわ。」

彼女は慌てて首を振つた。

「いえ、ただ不思議に思つて見ていただけです。」

「隠さずともよい。わしにはわかる。他人の本心が聞こえるのだ。」

「本心が?でも、気味が悪いなんて本当に……」

彼女が否定しようとも口を開くと、老婆はケタケタと軽い声で笑つた。おかしなことを言う老婆だと彼女は思った。二足歩行の狸など見たことがない。だから不思議だと思つていただけなのに。

不満そうな顔をしている彼女に青年が言った。

「気にしないで。僕たちもあの方が言つ葉ばかりが本心じゃないことくらいわかつてゐるから。」

優しく微笑む青年の隣でやつと椅子によじ登り座つた狸が何度も頷いた。老婆は気分を害したようになつた。

「だが、気味が悪いと思う心もある。それも本心ではないのかね。」

そう言った。狸が言い返した。

「そんなことを言つと彼女が嘘つきみたいじゃないか。」

老婆は鋭い目で狸を見て更に不機嫌になつた様子で顔を歪めた。青年が一つ手を叩いた。その大きな音にみんなの視線が集まつた。

「まずは食べましょう。空腹だから腹が立つんです。」

みんな青年の言葉に賛成した。

食事を済ませて部屋に戻ろうと通路を歩く彼女の行く先にさつきの狸がいた。料理の載つた皿を抱えている。食堂に姿を現さなかつた人に食事を届けに行くのだろう。

部屋に戻つてもすることが何もなかつたことを思い出した彼女は静かに狸の後を追いかけた。まだ会つていらない最後の一人の顔を見てみたかったのだ。だが、あまり堂々と顔を見に行くのは気が引けた。狸が他の部屋より大きく作られたドアの前で足を止めてノックした。窓の向こうで隙間なく閉まつた濃い紺色のカーテンが僅かに揺れた。ドアが開いて出てきたのは猫だった。体はオレンジの縞模様で熊ほどの大きさだ。大きな黄色い瞳でじっくりと小さな狸を見下ろしていた。

「食事、持つてきた。僕と他の人たちはもう済んだよ。」

狸が言つと、猫は面倒臭そうに背中を搔き、鋭い爪のついた大きな手で皿をつまみあげた。

「お前、よく人間と一緒に飯が食えるな。」

猫は低い声でそう言つてまた部屋に入った。

ドアの鍵が閉まるまで困った顔で立ち尽くしていた狸は振り向いてすぐに驚いて固まっている彼女に気付いた。

「大きな猫さんね。……部屋から出てこないの？」

「猫は人間が嫌いなんです。特にあの老婆が苦手らしい。」

最後の声を少し潜めて狸が言った。

「私も苦手。」

彼女が肩を竦めてそう言つと狸は笑つた。

「そうですね。僕も、少し。あの老婆のことを丁寧に扱うのは彼くらいでですよ。」

そう言つた狸が指差した先には青年がいた。突然指を差された青年は首を傾げた。

「猫の様子はどうでしたか？」

青年が聞いた。

「相変わらずでしたよ。」

狸が答えた。

「あなたの調子は如何ですか？」

「相変わらずですよ。」

青年と狸はそう言つて微笑み合つた。階段を降りてきながら老婆が言った。

「こんな船の上で満足な治療が出来るかと疑問に思つてあるわ。」

青年と狸は困った顔をした。

「治せなくとも楽にすることはできます。」

青年は言った。狸も

「僕たちが何事もなく暮らせるのは彼のおかげですよ。」

と言つたが、老婆はふんと鼻を鳴らして部屋に戻ってしまった。

「どうして老婆は本心を口にしてしまうんだろう。本当の気持ちを隠しても嘘にはならないし、それが必ず真実だとは限らない。」

狸が言つと、青年は肯定も否定もせず困った顔で笑つただけだった。

そのとき猫の部屋から大きな音が聞こえてきた。よく耳を澄ますと

それは猫の呻き声だつた。

青年がすぐさま自分の部屋まで走つて大きな荷物を抱えて戻り、猫の部屋へ入つていった。老婆も部屋から出てきて、猫の部屋へ入つていった。狸は階段を駆け上がりて食堂へ行つた。

「大丈夫、落ち着いて。どこが痛い？」

青年が猫の体を擦りながら耳を猫の口元に近付け聞いてみたが、猫はぜいぜいと苦しそうに息をするだけで答えることができなかつた。老婆が猫の心を聞いて言つた。

「左の腹が痛いそうな。」

それを聞いた青年は頷いて、すぐに処置を行つた。随分長い時間をかけて猫の呼吸が楽になつた頃、狸が氷水を持つて現れ、老婆は黙つて猫の部屋を出て行つた。

猫は狸が差し出した冷たい水を少し飲んで、小さな溜息をついた。その口の動きが「ありがとう」と言つてゐるよつと見えた。

「猫さん、どこか悪いの？」

彼女が聞くと狸が答えた。

「治らない病氣だ。」

猫が僅かに頷いて重い口調で言つた。

「もう永くない。」

そう言つた猫よりも辛そうな顔で青年が頷いた。彼女は猫と青年に何と言つていいかわからず、黙つて青年に寄り添い、手を握つた。猫の部屋を出た彼女は食堂で狸が淹れてくれた紅茶を飲んでいた。青年は猫に付き添つてゐる。

老婆が入つてきた。

「わしも茶をいただこう。」

狸は頷いて厨房へ歩いていつた。彼女が老婆に聞いた。

「どうして陸地できちんと治療を受けないので？」

「きちんとした治療を受けて命を永らえることばかりが必ずいいとは限らぬ。」

「じゃあ何故みんなはこの船に乗つてるの？何をするため？」

老婆は出された紅茶を啜り、答えた。

「では、お前さんは何をするためにこの船に乗り込んだのだ？できることは何もないだろ？皆も同じだ。」

「でもあの人は猫さんの治療をしているんでしょう？」

「ああ、だが治せぬものに治療など意味はない。何もしていないとと同じだ。」

彼女はその言葉を否定したかった。それでも辛そうな青年の顔を思い出し、その無力感を考えると、どうやら言葉は正しいような気がした。彼女の迷いが聞こえたのか、老婆は探るように彼女の目を覗きこんでクククと笑つた。

「この船はどこへ行くの？」

「何処へも行かない。ただ船が前に進むだけ。それだけだ。」

老婆はニヤリと笑つてもう一口飲んだ。

「お前はどこへ行きたい？」

老婆の問いに彼女は口を噤んだ。老婆はおもしろいのにクツクツと笑つた。が、しばらくすると笑つのをやめた。

「階下で泣き声がするな。猫が呼んである。」

三人が猫の部屋に行くと、猫の目がゆっくり開いた。

「逝くか。」

老婆が聞くと、猫は静かに頷いた。呼吸は浅く苦しそうだが、表情は穏やかだ。

狸が小さな手で猫の大きな手を握る。彼女が座り、青年の手と重ねるように猫の手を握つた。老婆はドアの前で睨むように猫を見ていた。猫は嬉しそうに目を細めた。

「何か言い残すことがあるなら聞かせてみる。わしが皆さんに伝えてやる。」

猫がゆっくりと瞬きをして、掠れた声で言つた。

「婆さんはここから出て行つてくれ。」

その言葉を聞いた全員が驚いて目を見開き、耳を疑つた。老婆は顔を歪めて悔しそうに額くと部屋を出て行つた。全員が老婆が出て行

つたドアを見つめ、信じられないほど重い沈黙の中、猫の呼吸だけが響いていた。握られた手を握り返して猫は言った。

「最期にみんながいてよかつた。俺はあまりいい奴ではなかつたが、それでもみんなは優しくしてくれた。大好きだつたよ。今まで、本当にありがとつ。」

そう言って目を閉じた。呼吸が段々と弱く小さくなり、最後に大きく胸を上下させて深呼吸をした後、猫は眠るように死んだ。狸は猫の手に顔を埋めて泣いた。青年はきつく唇を噛み締め、肩を震わせていた。彼女はそつとその肩を抱いた。悲しみで壊れてしまわないよう強く抱いて自分も泣いていた。目の前で逝つた猫の死も十分に悲しかつたが、青年の肩から伝わる悲しみが胸に突き刺さるよう痛かつた。それだけ悲しんでいても泣くことのできない青年の涙が自分の目を通して流れているような気がした。

やつと立ち上がり、無言で自分の部屋に戻ろうとする青年を見送り彼女も部屋に戻ろうとして通路を歩いていると老婆に会つた。彼女は涙の跡を拭つて言った。

「猫さんがあなたを追い出したのにはきっと何か理由があつたんだと思うわ。」

慌てて弁解をしようとする彼女に微笑みかけ、老婆は頷いた。

「わかつてある。お前たちに聞こえる声だけが眞実ではない。……

猫はきちんと自分の口で、自分の言葉で別れを伝えられたか？」

彼女は大きく頷いた。

「そうか。ならばよい。それでよかつたのだ。」

老婆は満足そうに頷いた。そして

「お前は何も伝えずに帰つて、それでよいのか？」

と言つた。彼女は首を傾げた。

「誰に何を伝えるの？」

「あの男に思いを伝えず、何も残さず帰つてよいのか？」

彼女は驚いた。湧き上がつたばかりの愛しさを老婆に知られることではない。彼女にはこことは別の世界があり、帰るべき世界がある

と老婆が知っていたことに驚いた。彼女は夕闇に覆われた海を見つめ、少し考えてから言った。

「まだ、伝える気はないわ。」

「船は絶えず動き続いている。今を逃せば機会は永遠に失われるかも知れぬのだぞ。」

彼女は微笑み、頷いた。

老婆が彼女の部屋の扉を開いた。彼女は迷わず扉をくぐった。

潮騒が消え、螢光灯の世界が広がる。老婆が念を押すように聞いた。

「本当によいか？」

彼女は自信ありげに言った。

「今はそうするべきときじゃない気がするの。それに彼と私が繋がる運命ならばまた必ず何処かで巡り合つはずよ。」

その言葉を聞いた老婆は笑った。

「行くべき場所を見つけたか。」

電車が溜息をついた。

電車の扉が閉まる。小さな窓の向こうで夕闇の中に浮き上がった老婆が細い手を振っている。彼女も手を振り返した。

ガタン、と電車は大きく揺れて走り出す。老婆は段々と遠く小さくなり、夜の闇の中に消えていった。

「ご乗車、ありがとうございます。どなた様も今宵のことをお忘れなきよう願います。またのご乗車お待ちしております。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9942v/>

Story Train

2011年8月21日23時29分発行